

庄内小学校遺跡

屋内体育館建替えに伴う発掘調査

2010年3月

宮崎県都城市教育委員会

序 文

本書は、庄内小学校屋内体育館建替えに伴い、都城市教育委員会が実施した庄内小学校遺跡の発掘調査報告書です。

庄内小学校が位置する場所は、室町時代、本郷氏によって築城された中世山城である安永城の南東麓にあたり、江戸時代には地頭仮屋が置かれたと言われている場所の南東隣接地です。また、明治時代からは小学校が、昭和10年までは旧役場としても利用されていました。

発掘調査の結果、弥生時代・中世・近世～近代にわたる遺構・遺物が確認されました。特に江戸時代から明治時代の集落跡が見つかったことで、当時の庄内小学校周辺の様子をうかがい知ることができました。

本書の刊行を通じて、このような地域にとって大切な文化財に対する理解と認識が深まっていくことを願っています。

最後に、この発掘調査に際し、ご理解とご協力をいただきました庄内小学校関係者の方々、地域の方々そして、発掘作業に従事していただいた市民の皆様に心より感謝申し上げます。

2010年3月

都城市教育委員会
教育長 诵句 醍以

例 言

1. 本書は庄内小学校屋内体育館建替えに伴って、都城市教育委員会が平成21年度に実施した庄内小学校遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2. 本書に使用したレベル数値は海拔絶対高、座標は国土座標を用い、基準方位は真北である。

3. 現場における遺構及び土層断面の実測は、市文化財課山下大輔の協力を得て久松亮・加賀淳一・栗山葉子・立石カズ子・馬籠恵子があたり、本書に掲載した遺構及び土層断面の製図は栗山が行った。

4. 遺構及び土層断面の写真撮影は栗山が行った。

5. 本書に掲載した遺物の実測は、整理作業員と栗山が行った。また、縄文・弥生時代を除く遺物と全ての遺構の製図は株式会社CUBIC「トレースくん 2009」を用い、Adobe Illustrator CS3にて栗山が編集を行った。なお、これらの遺物写真の撮影は栗山があたった。

6. 本書の執筆・編集は栗山が行った。なお、出土陶磁器については、市文化財課桑畑光博、大盛祐子の教示を得た。

7. 本書で用いた遺構の略記号は以下のとおりである。

SB：掘立柱建物跡 SC：土坑 SD：溝状遺構 SE：井戸跡 SF：道路状遺構 T：トレンチ

8. 発掘調査で出土した遺物とすべての記録（写真・図面等）は都城市教育委員会で保管している。

本文目次

第1章 序説	
(1) 調査に至る経過	1
(2) 調査の組織	1
第2章 遺跡の位置と環境	1
第3章 遺跡の調査	3
(1) 発掘調査の方法	3
(2) 遺跡の層序	5
(3) 繩文～弥生時代の遺構と遺物	6
(4) 中世の遺構と遺物	8
(5) 近世～近代の遺構と遺物	9
第4章まとめ	26

挿図目次

第1図 遺跡位置図	2
第2図 調査区域及びグリッド配置図	3
第3図 遺構配置図	4
第4図 土層断面図	6
第5図 繩文・弥生時代の遺物	7
第6図 SC07	8
第7図 中世遺物	8
第8図 東側調査区遺構配置図	10
第9図 SB01-1・SB01-2	11
第10図 SB03・04	12
第11図 SB05・06	13
第12図 SB02	14
第13図 SB07	15
第14図 SF01 (SD01・02)	16
第15図 SF02 (SD03・04)	17
第16図 SC01	17
第17図 SC02・03	18
第18図 SC04 (埋甕)	19
第19図 SC06	19
第20図 SC05	19
第21図 SC09	19
第22図 SD05	20
第23図 SE01	20
第24図 SE02	21
第25図 近世～近代の遺物①	22
第26図 近世～近代の遺物②	23
第27図 近世～近代の遺物③	24
第28図 近世～近代の遺物④	25

図版目次

図版1	27
1. 東側調査区東壁土層 (SC02 東側)	
2. 東側調査区東壁土層 (SC03 東側)	
3. 南側調査区南壁土層堆積状況	
4. 南側調査区南壁土層拡大	
5. 南側調査区遺物出土状況	
6. 土器出土状況	
7. SC07 断面	
8. SC07	
図版2	28
9. SB01・SC02・SC03	
10. SC01・SF02	
11. SF01	
12. 東側調査区南西部柱穴完掘状況	
13. SC03 土層断面	
14. SC02 土層断面	
15. SC02 完掘	
図版3	29
16. SC04 半裁状況	
17. SC09 半裁状況	
18. SC06・SE01 土層断面	
19. SC06 完掘	
20. SE01	
21. SE02	
22. 遺跡見学会	
23. 発掘体験	
図版4	30

第1章 序説

(1) 調査に至る経緯と経過

平成20年度当初に、都城市教育委員会教育総務課から庄内小学校屋内体育館建替えに伴って、埋蔵文化財の有無の照会が都城市教育委員会事務局文化財課(以下文化財課)に提出された。これに対し、文化財課は、平成20年11月11日～13日に試掘調査を実施した。その結果、中世土師器を含む柱穴と近世遺物を含む遺構を確認し、庄内小学校全域を庄内小学校遺跡とし、宮崎県教育委員会へ報告を行った。

この結果を受けて、都城市教育委員会教育総務課と文化財課で協議を重ねた結果、建替え予定である屋内体育館のうち既存屋内体育館を除く部分について、平成21年度に本発掘調査を実施することとなった。

庄内小学校遺跡にかかる文化財保護法第94条の2第1項の届出(土木工事の届出)は平成21年7月7日付けで提出され、同遺跡の現場における発掘調査は、同年の8月3日から10月9日まで実施した。発掘調査報告書については、現場における調査終了後同年度内に作成することとなった。

調査期間中の平成21年8月31日には、庄内小学校の生徒及び保護者を対象とした遺跡見学会と発掘体験を、同年9月6日には一般市民を対象とした遺跡見学会と発掘体験を行い、計約100名の参加があった。また、平日の道徳や社会科の授業を利用して、庄内小学校1・3・6年生の生徒が遺跡見学を行っている他、地域の方々が時折現場見学に来られた。

(2) 調査の組織

調査主体者 宮崎県都城市教育委員会

調査責任者 教育長 玉利謙 (平成22年2月24日まで)

酒匂醜以 (平成22年2月25日から)

調査事務局 文化財課長 坂元昭夫

文化財課副課長 山下進一郎

文化財課主幹 矢部喜多夫

文化財課副主幹 萩原光博

調査担当者 文化財課主査 栗山葉子(8月3日～9月28日)

文化財課主査 久松亮(9月29日～10月9日)

文化財課主事 加賀淳一(9月29日～10月9日)

発掘作業従事者 曽原主吉 立石カズ子 鶴松雄 東春雄 広畠雄二 馬籠恵子

整理作業従事者 奥登根子 尾曲真貴 新徳より子 福岡八重子

第2章 遺跡の位置と環境

庄内小学校遺跡の所在する宮崎県都城市は、宮崎県の南西部に位置する都城盆地のほぼ全域を占める。この盆地は、北西を標高1300～1700mの霧島火山群、西方を瓶台山(標高543m)や白鹿山(標高604m)などの山地に、東から南を鰐塚山(標高1119m)・柳岳(標高968m)を主峰とする山地に囲まれ、西南方のみわずかに開かれた地勢を呈し、南北約30km、東西約31kmの楕円状をなしている。

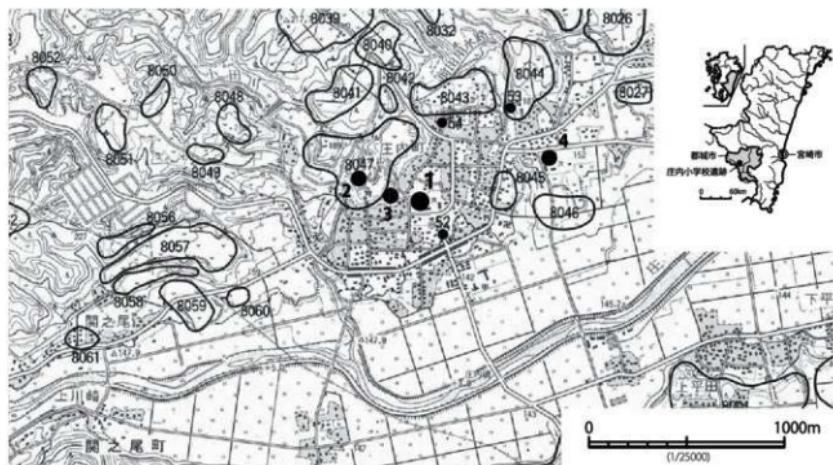
盆地中央部には多くの支流を集めながら大淀川が南から北へ貫流している。その支流のひとつである庄内川北岸の庄内川段丘群に庄内小学校遺跡は位置する。遺跡の標高は156～157mである。

遺跡西北部の諫訪原台地南端には中世城館である安永城跡が所在している。安永城は南九州型の城郭で、群郭式といわれるものである。この城は本郷敏久が応仁2年(1468)に築城したと伝えられ、元和の一国一城令(1615)で廢城になるまで存続していた。庄内の乱(1599～1600)の際には戦場になったとも伝えられている。廢城後、城郭内の麓には地頭仮屋が置かれた。ちょうど庄内小学校西北隣接地にある。

また、遺跡から東へ約700mといった地点には、桑原遺跡が位置している。平成11年に庄内中学校校舎建替えに伴い発掘調査を実施し、縄文・弥生・古代・近世の遺物が見つかっている。

庄内小学校遺跡が位置する場所は、その名の通り、現在は小学校として利用されている。記録によれば、庄内小学校の歴史は古く、明治3年には現在の校舎敷地内にて読み書き習字を教え始め、明治6年には庄内女学校が開校、翌明治7年には現在の小学校正門南東の軍人馬場に校舎を新築している。西南戦争時には病院として使用され、その後、明治24年に新築した校舎は大正4年まで使用されていた。以降、校舎増築、敷地拡大し、現在の運動場あたりにあったと考えられる谷（深さ2丈）を埋めるに至っている。しかしながら、大正8年9月22日、火災によって全てが灰に帰した。

初期の校舎の位置を特定するに至っていないため、詳細は不明であるが、おそらく現在の正門付近から徐々に敷地を拡大したと考えられるため、今回調査を行った付近は、初期段階では小学校敷地には含まれていなかったと考えられる。また、現在の体育館付近には昭和10年までは旧庄内町役場及び登記所等が置かれていたことが分かっている。



1：庄内小学校遺跡 2：安永城跡（8047） 3：地頭仮屋跡 4：桑原遺跡

第1図 遺跡位置図

【参考文献・参考資料】

「学校日誌 庄内尋常高等小学校 大正八年九月」庄内小学校文書

遠藤 尚 1980 「地形区分」「土地分類基本調査 郡城」宮崎県

下田代清海 2002 「桑原遺跡」都城市文化財調査報告書 第56集 都城市教育委員会

庄内の昔を語る会 2003 「写真で見る庄内のむかしといま」庄内 第15号

庄内村治要項調査委員会 1914 「庄内村治要編」

田中忠光 1987 「都城の地形」「都城市史 通史編 自然・原始・古代」都城市

八巻孝夫 1998 「安永城跡」「都城市の中世城館」都城市文化財調査報告書第45集 都城市教育委員会

横山哲英 2006 「金石城跡（安永城跡）」「都城市史 資料編 考古」都城市

第3章 遺跡の調査

(1) 発掘調査の方法と概要

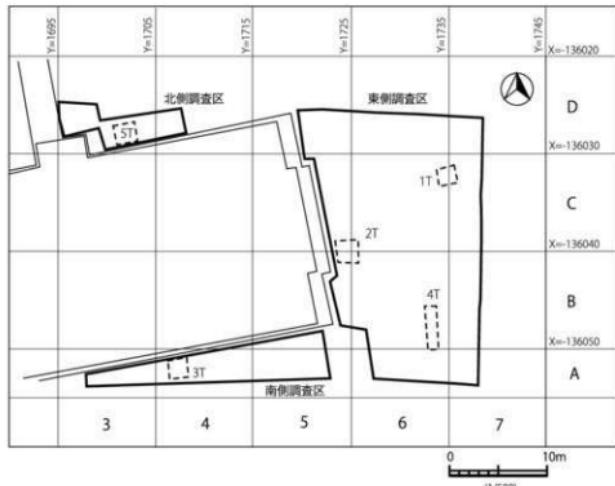
平成20年度の試掘結果と工事計画を考慮した結果、既存体育館を除く建替え部分の調査を行うこととなった。また、既設の排水及び水道管等を避け調査を行ったため、調査範囲は既存体育館北側、東側、南側の3ヶ所に分けて調査を行うこととなった（以下「北側調査区、東側調査区、南側調査区」と呼ぶ）。

現代の表土及び造成土については重機にて掘削を行い、その後は人力にて掘り下げを行った。

もともと傾斜地である南側調査区では、中世以前の遺物包含層が大部分残されていたものの、旧庄内村役場（明治～昭和10年）の入り口や側溝等による削平のほか、明治～大正時代と考えられるゴミ穴等の削平も多く見受けられた。調査区南端に土層確認のためトレーニングを設定し、それ以外については面的に掘り下げ、遺構検出及び遺物の取り上げを行った。北側調査区及び東側調査区においては、昭和の旧校舎建設時に、御池軽石層までほぼ水平に削平を受けていたほか、南側調査区同様、明治～大正時代のゴミ穴や、現代のゴミ穴等が多く見受けられた。削平を受けていたため、表土除去後は遺構検出・遺構掘り下げへ移行した。また、東側調査区の南端については、大部分がかなりの深度まで削平を受けていたため、削平されていない部分を中心としたトレーニング調査とした。

調査範囲には、SNを基準とした10m×10mのグリッドを設置し、南北をアルファベットで、東西を算用数字で表した。遺構の測点及び遺物の取り上げはトータルステーションを用いて測量を行い、土層断面図は調査区東側と南側で作成した。各遺構の調査は断面図を作成し、検出、半裁、完掘状態でそれぞれ土層、平・断面図、写真による記録を行っている。

遺跡からは縄文時代～弥生時代、中世、近世～近代、特に幕末～明治にかけてのものと考えられる遺構・遺物が検出されている。縄文時代～弥生時代の遺構・遺物については、南側調査区より検出されている。中世については、柱穴群が検出されているが、後世の削平によって残存状況は良好とはいえない。近世～近代にかけては掘立柱建物跡、土坑、道路状遺構、溝状遺構、井戸等が検出されている。



第2図 調査区域及びグリッド配置図

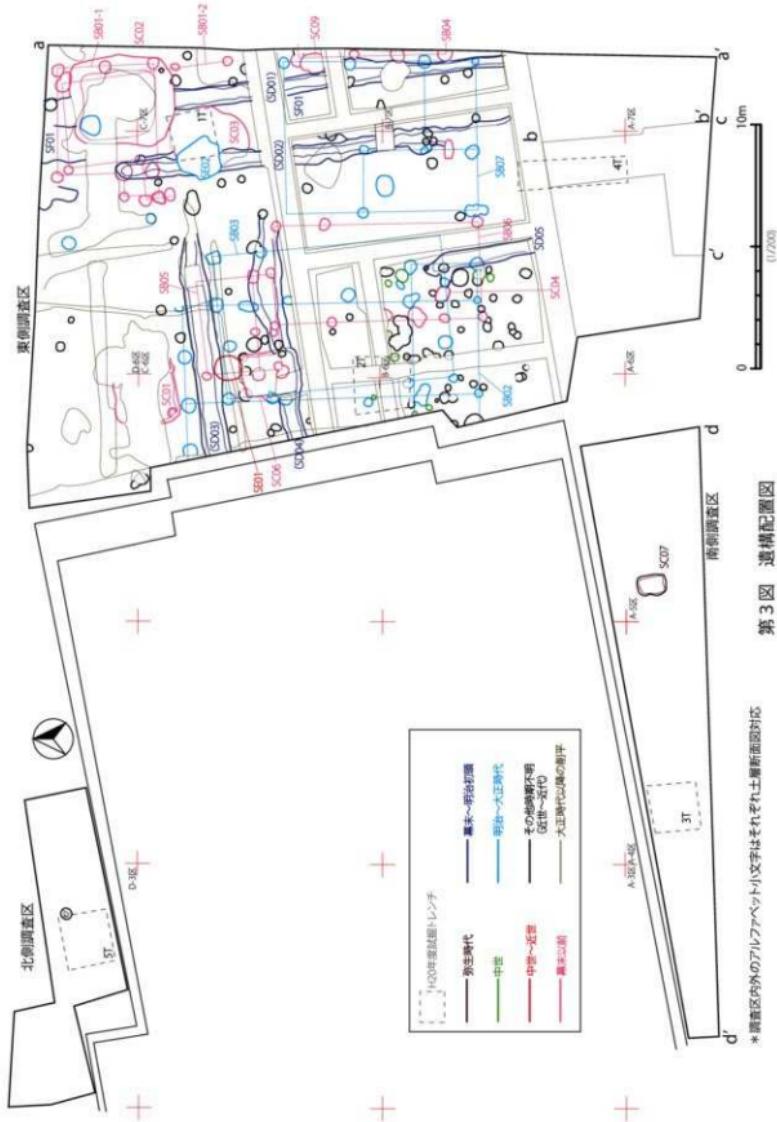


図3 遺構配置図

*調音区内外のアルファベット小文字はそれぞれ土層断面圖対応

(2) 遺跡の層序

昭和の校舎建設に際して東側調査区（南端を除く）では、基礎部分を中心に現況より1m近く掘削が行われている。それ以前については、おそらく南西から北東にかけて緩やかに高まりがあったと思われる。これは、2つの井戸の壁面より、御池軽石以前の土層が南西から北東にかけてやや高くなっていることからも確認できる。中世段階での地形は不明であるが、中世の遺物包含層及び柱穴等の遺構の残存状況から、中世においては、前述の地形を保っていたと考えられる。後述する幕末～明治にかけての遺構の埋土にはすでに造成土が多量に含まれることから、近世以降、徐々に掘削・造成が繰り返され、おそらく明治から大正時代にかけて大がかりな造成を行っていると思われる。この要因は、おそらく明治以降の庄内小学校の敷地拡大であると考えられる。また、大正・昭和と2度の火災によって校舎が焼けた際のゴミ穴と考えられる擾乱も調査区内で多く見つかっている。

土層断面図は、東側調査区東壁（南端については削平を受けていたため、トレンチ東壁）および南壁、南側調査区南壁で作成した。

I - ①層：表土（現小学校造成土）

I - ②～⑩層：旧表土（近世以降の擾乱・造成土）。基本的に黒色～褐色を呈し、灰色味を強く帯びる層で、御池軽石のみを多く含む層と御池軽石及び文明軽石を含む層が認められるが、その違いが時期差を示すものかは不明である。また、造成土中には御池軽石と砂で構成される層も認められ、大幅な地形の掘削・壊変が行われたことが伺える。擾乱土中には軽石・礫等とともに、瓦や陶磁器類等も含まれる。

II - ①～⑥：II層を主体とした擾乱土。濃く褐色から暗灰褐色を呈し、御池軽石・文明軽石を含む。

II層：中世後期以降近世の遺物包含層。暗灰色砂質シルト土で文明軽石を含む。後世の擾乱・造成により、調査範囲の南壁では確認できるものの、面的に検出することはできなかった。

III層：文明軽石層（15世紀後半桜島より噴出）。南側調査区南壁の一部で確認された。層として確認することはできず、いずれもブロック状に点在する状態であった。

IV層：黒色粘質シルト土。場所によって2層に分かれ、上方のIVa層がやや灰色を帯びさらさらとした質感で御池軽石と思われる黄色軽石をほとんど含まない。下方のIVb層が黒色を呈し御池軽石をまんべんなく含んでいる。

V層：暗褐色～茶褐色粘質シルト土。上方のVa層は茶褐色を呈し、御池軽石を多く含んでいる。下方のVb層は暗褐色を呈し、御池軽石をより多く含んでいる。場所によって、Vbの最下部に御池軽石層の漸移と考えられる、御池軽石を主体とする暗褐色粘質シルト土が形成されている。

VI：御池軽石層（霧島御池より約4,200年前に噴出）

VII：黒色粘質シルト土

VIII：灰黄褐色微粘質シルト土

IX：アカホヤ火山灰層（約6,500年前に喜界カルデラより噴出）

X：黒色粘質土

X I：黒褐色粘質土（P11）

X II：黄褐色粘質シルト土

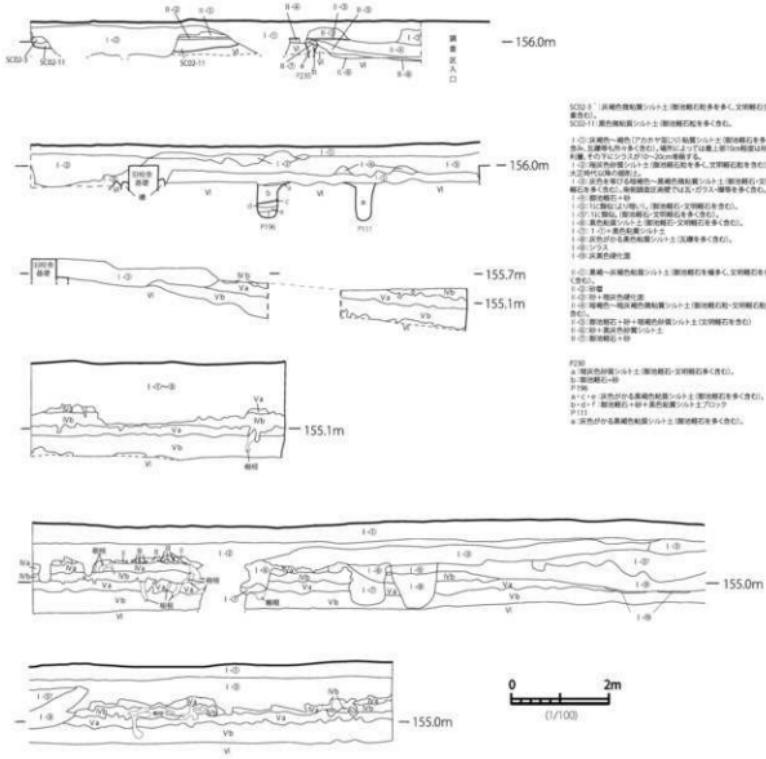
X III：灰黄褐色粘質シルト土

X IV：黄褐色粘質シルト土

X V：浅黄橙色粘質シルト土

X VI：シラス

東側調査区南端トレント及び南側調査区のIV～V層にかけて縄文時代晚期～中世の遺物が出土しているが、傾斜地であり、また、樹根、近世以降の擾乱等も多く、明確に層位で遺物の時期を分けることはできなかった。また、近世遺物の大半は上部より掘り込まれた擾乱層中及び造成土中より出土している。遺構内出土の遺物についても、流れ込みが多いと考えられる。



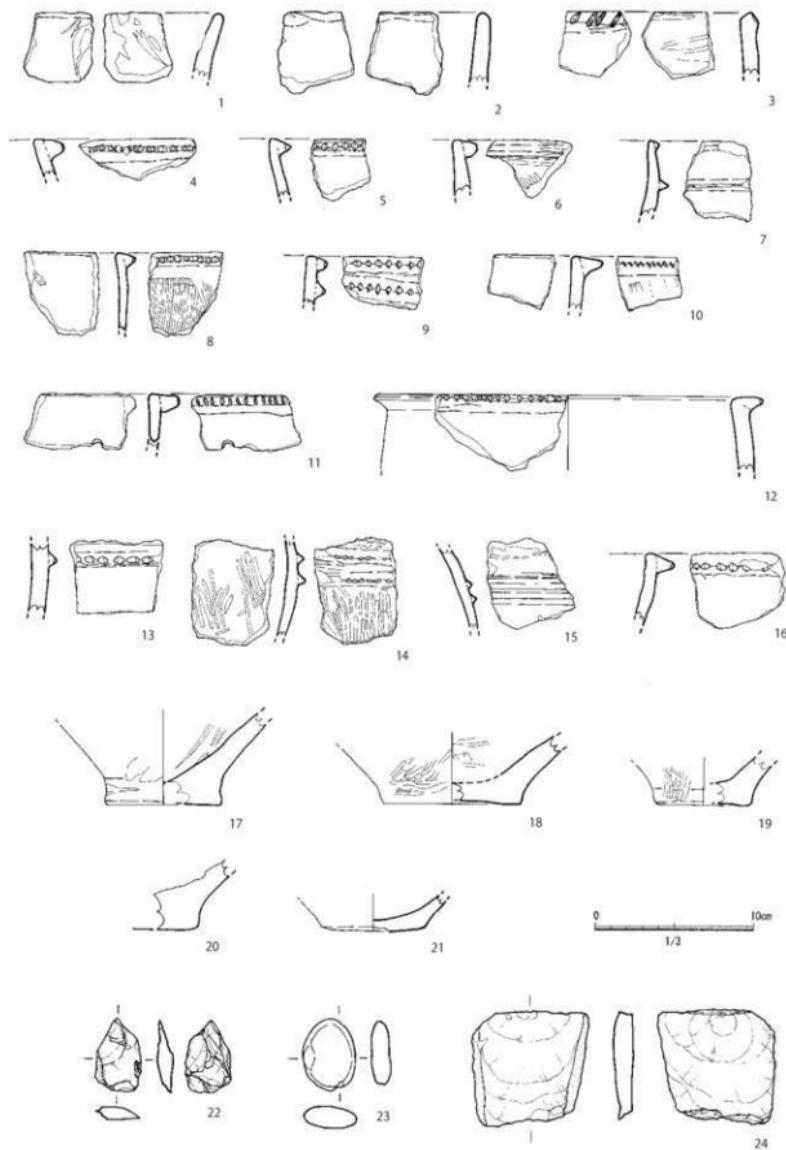
第4図 土層断面図

(3) 繩文時代～弥生時代の遺構と遺物

A-5区より弥生時代と考えられる土坑が1基検出されている。また、東側調査区南端トレンチ及び南側調査区ではIVb～Vb層にかけて、縄文時代晚期から弥生時代前期～中期の土器が出土しているほか、輝石安山岩の剥片等の石器も出土している。縄文時代晚期と思われる土器片は極僅かで、弥生前期～中期の土器が割合多く出土しているものの、遺物包含層が残されている範囲が狭小であるため、総出土量はそう多くなく、また、口縁部や底部資料は認められるものの、いずれも小片に留まり、器形全体が復元できるような資料は見られなかった。

①土坑(第6図)

SC07：主軸は南北で、長軸1.18m、単軸0.9m、深さ0.23mの隅丸の長方形を呈す。IVb層中より掘り込まれたと考えられ、Va層上面にて検出した。土坑内からは弥生土器片が1点出土したほか、検出面より上位からも弥生土器が出土している。埋土は單一で、黒色粘質シルト（IVb層）を主体とし、Va層ブロックをわずかに含んでいる。



第5図 繩文・弥生時代遺物

②遺物（第5図）

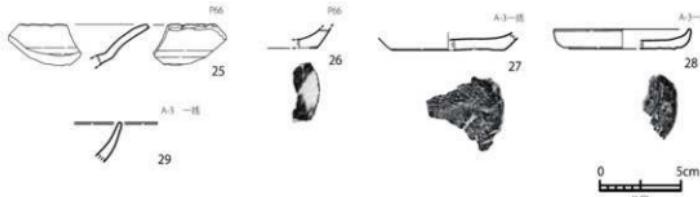
1～3は深鉢の口縁部である。1は内面がミガキ、外面は丁寧なナデが施される。2はほぼ直行し口縁部内面には粘土の継ぎ目が残る。3は突帯文土器で、内面は磨きで外面はナデによる調整が施され、煤が付着する。この他突帯文土器1点の他、繩文土器片が数点出土している。

4～21は弥生時代前期～中期の土器である。胎土は褐色～赤褐色を呈し白・赤・黒色の鉱物を含む。4・5は口縁部に刻目突帯が貼り付けられる。6は外面にミガキが施され突帯付近に煤が付着する。7は丁寧にナデが施される。8は外面はハケ目が残り煤が付着する。また、内面は一部工具痕が残り煤が付着する。9は外面に煤が付着する。10は細かい刻目を有し、突帯より下位にハケ目が残る。11は突帯より下位に補修孔が認められる。12は復元口径が24.6cmの甌で、外面に煤が付着する。13は突帯付近に煤が付着する。14は内外面に煤が付着する。胴部に二条の刻目突帯を有し、内外面ともミガキが施される。15は壺形土器で、二条の突帯の上部にはミガキが認められ、若干段を有す。16は鉢形土器で口縁部に刻目突帯を有す。17～20は甌形土器の底部で、21は壺形土器の底部である。17は内外面に工具痕が残る。底径7cm。18は工具によるナデの後ミガキが施される。底径8.6cm。19は外面にハケ目が残る。底径6cm。20は外面にナデが施される。21は底径6.6cmで内外面ともナデが施される。やや磨耗している。22は黒色頁岩の磨製石錐未製品。重量9g。23は凝灰岩の円礫で下端に溝状の窪みが認められ磨耗している。重量21g。24は輝石安山岩の剥片である。重量104g。

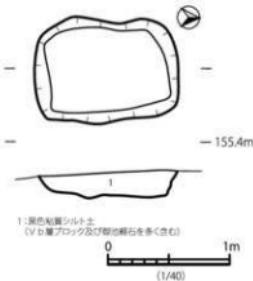
（4）中世の遺構と遺物

遺構が検出されたのは、東側調査区の平坦面である。しかしながら、近世以降の削平によって、近世以前の遺物包含層及び当時の生活面は残されていなかった。そのため中世と考えられる遺構は旧地形からの削平の少ない部分でのみ確認された。検出された遺構は柱穴である。柱穴自体の残存状況も芳しくなく、建物等は確認できなかった。中世の遺物については、南側調査区の遺物包含層中から出土しているものの、出土数は限られている。また、埋土に文明軽石をわずかに含む井戸跡が1基検出されているが、井戸内からの出土遺物もほとんどなく、詳細な時期が不明であるため、これについては、近世～近代の井戸跡と一緒にまとめ報告している。

25～29は中世の所産と考えられる遺物である。25はP66より出土した青磁片で稜花皿である。15世纪中頃～16世纪中頃と考えられる。26もP66より出土した土師器片で底部の切り離しは糸切によるものある。27～29はA-3-2区（南側調査区）の包含層中より出土した土師器である。27・28は底径約8cmの小皿で、底部切り離しは糸切である。29は土師器口縁部片である。また、この他に後述する近世の遺構である土坑(SCO2)内より底部糸切の土師器(60)が出土している。また、小片であるため図示していないが、P42より土師器片が数点出土している。



第5図 中世遺物



第6図 SC07

(5) 近世～近代の遺構と遺物

近世～近代の遺構は多数検出されたものの、切り合いも激しく、造成によって遺物包含層がほとんど削平されていること、埋土が造成によって攪拌された土であることなどからも、各遺構の詳細な時期を比定することは非常に困難な状態であった。

近世～近代の遺構は掘立柱建物跡 8 棟（建替を含む）、側溝を有する道路状遺構が 2 条、土坑 8 基（池状遺構 2 基と埋甕 1 基を含む）、溝状遺構 1 条、井戸跡 2 基である。うち、土坑（SC01・02・03・04・05・06）については江戸後期、道路状遺構 2 条については幕末から明治にかけて、掘立柱建物跡 2 棟（SB02・07）については大正時代（大正 8 年以前）のものと考えられる。

大正 8 年に小学校校舎が火災に遭い全焼している記録から、調査区内に認められた焼けた瓦を含むゴミ穴は、その当時のものである可能性が高い（ゴミ穴出土陶磁器類の年代もほぼ同じ）。よって、これらのゴミ穴によって削平を受けた遺構は少なくとも、大正 8 年以前のものであると考えられる。

現代の小学校建設によって包含層等、当時の生活面は削平されているため、近世～近代の遺物の出土は少ないものの、遺構内や表土中より当該期の陶磁器類・瓦等が出土している。

1. 遺構及び遺構内出土遺物

①掘立柱建物跡（第 9～13 図）

江戸時代～大正時代までを含む 8 棟確認した。

SB01-1：D-7 区を中心に検出された。建物の主軸は南北方向（N-4°-E）である。確認されたのは梁間 1 間 × 衍行 2 間で、西側の一部に廂をもつ。廂を除く建物の規模は東西 2.2m、南北 2.2 m である。後述する SB01-2 とは建替えである可能性が高いが、両者の前後関係は不明である。

柱穴の埋土は、灰褐色から暗褐色の微粘質シルト土が主体で、柱痕が認められるものもある。柱穴は御池軽石と砂を主体とする埋土が脇に見られ、柱穴検出時には柱痕のみを確認していたことになる。よって、柱穴掘削時、すでに御池軽石層まで削平されていた可能性は高く、また、後述する道路状遺構（SF01）の硬化面が柱穴を一部塞いでいるため、それ以前の建物であると考えられる。図示していないが廂部分の柱穴より薩摩焼茶家片が出土している。

SB01-2：は SB01-1 と位置及び主軸をほぼ同じくし、規模も類似している。建物の主軸は南北方向（N-7°-E）で、SB01-1 同様西側に一部廂を持つ。廂を除く建物の規模は東西 1.95 m、南北 3.7 m で、確認されたのは梁間 1 間 × 衍行 3 間である。検出面が低いため、柱穴の残りが悪く、SB01-1 同様道路状遺構（SF01）より古い時期の建物と考えられる。

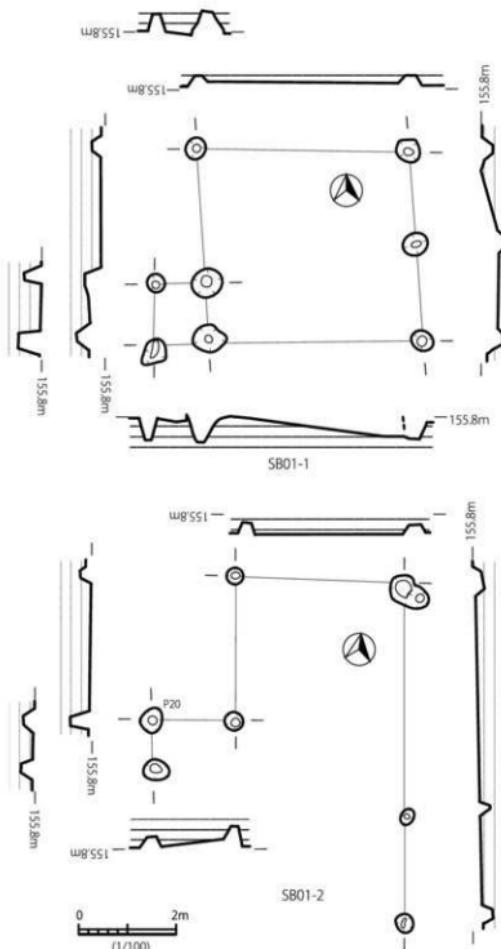
30 は SB01-2 の P20 より出土した肥前系染付蓋である。内面は四方禪文、見込みに二重團線とコンニャク印判による五弁花、外面は唐草花文が描かれている。また、同じく P20 からは後述する SD02 出土資料と接合する染付端反腕（49）が出土している。

SB03：旧小学校校舎基礎により、検出できていない柱穴が多いものの、柱の並び、埋土より判断した。1 間 × 3 間に東側及び南側に縁を持つもので、建物全体の規模は、東西 6.3 m、南北 9.8 m である。建物の主軸は南北方向（N-6°-E）である。P119 では 30cm 大の安山岩の礎石が出土している。**32～34** は SB03 柱穴内より出土した遺物である。**32** は P186 出土の肥前系染付碗で、外面に梵字文が描かれる。**33** は P119 出土で、口唇部を除き内外面には鉄軸が施釉されている苗代川系の薩摩焼甕である。**34** は P145 より出土した薩摩焼土瓶片で、復元口径は 10.4cm である。

SB04：調査区東端でその一部（南北方向 3 間：約 6.6 m）を検出している。時期は SD01 を含む道路状遺構以前（幕末～明治以前）の建物と考えられる。これらの柱穴の主たる埋土は御池軽石で、検出時の埋土の外側に砂混じりの御池軽石層が認められる。建物の一部のみ検出しているため、規模は不明である。図示していないが P196 より染付及び薩摩焼甕片が出土している。



第8図 東側調査区遺構配置図



第9図 SB01-1・SB01-2

径 10.8cm、底径 9.0cm、器高 2.3cm で、底部の切り離しは糸切りである。**36・37** は在地産（平佐か？）の可能性がある染付輪花皿で、内面に山水文が描かれる。**36** が口径 10.25cm、底径 4.85cm、器高 2.8cm、**37** が口径 10.4cm、底径 4.85cm、器高 2.65cm で、見込み中央から裏面まで 4mm 程度の孔が斜めにあいている。**38** は染付端反碗である。口径 10.0cm、底径 4.0cm、器高 5.8cm で、見込みには花文、外側には蝶・草花文が描かれる。**39** は見込みに菊花文、外側に草花文が描かれる染付で、底径 4.1cm である。おそらく **38** と同型の碗と思われる。**40** は、肥前径染付で、口径 6.5cm、底径 3.1cm、器高 3.8cm。**41** は SB07 内の P64 出土の肥前系染付蓋である。外側の文様は型紙刷りによるものである。口径 10.4cm、底径 12.0cm、器高 4.2cm。

SB05：後述する SC06 より新しく、SD04 よりも古い。確認された規模で、東西 4.4m、南北 3.6m の 1 間 × 2 間の南側に廂を持つ。廂部分の柱穴が深くなっている。建物の主軸は東西方向 (N-85°-W) である。

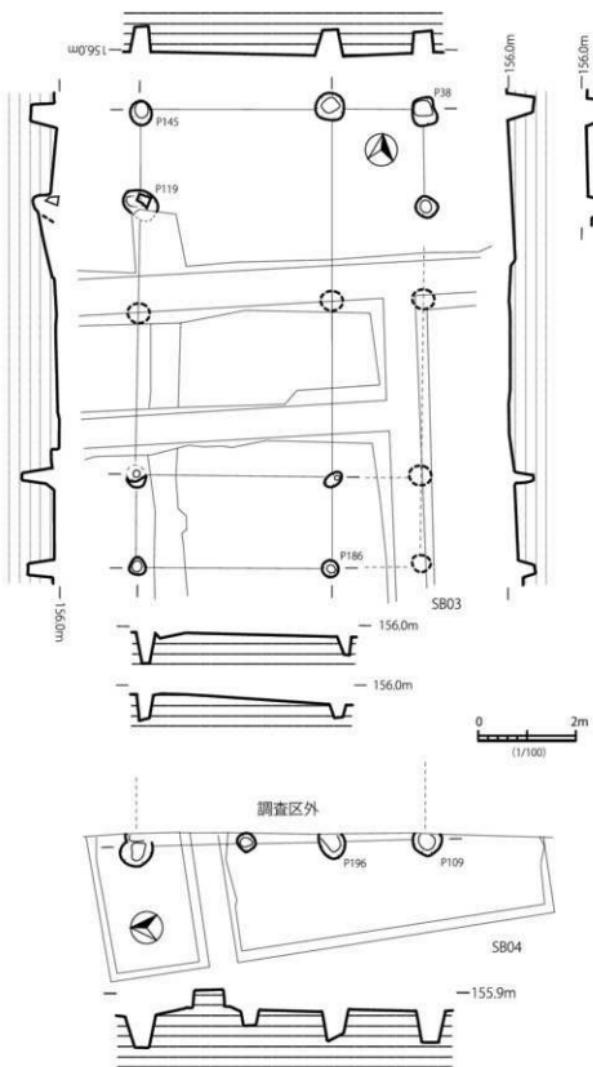
SB06：後述する SD04 より古い。建物の四隅の柱穴が他の柱穴よりやや深い特徴がある。規模は 1 間 × 4 間で、東西 4.4m、南北 8.9m である。建物東面の柱穴が 2 基検出されていないが、この部分は近代以降の削平を受けており、他の柱穴の深さを考慮すると、その際に削平されたものと考えられる。建物の主軸は南北方向 (N-3°-E) である。

SB02：明治から大正にかけての遺物が柱穴内から出土する掘立柱建物跡である。後述する SB07 と棟方位、位置関係等から、おそらく同時に存在していた一連の遺構としてとらえられる。また、この時期の遺構として、後述する井戸跡 (SE02) が挙げられる。

南北 4 間、東西方向 3 間以上で建物南の東側に廂を持つ。建物の主軸は南北方向 (N-1°-E) で、建物の規模は東西約 8m 以上、南北 12.5m を測る。建物内に、浅い土坑状の柱穴 (P191) が認められる。**44** は P191 内より出土した薩摩焼土瓶である。

SB07：SB02 の東側に位置する。建物の主軸は南北方向 (N-2°-E) で、規模は 2 間 × 3 間の、南北 8m、東西 6.5m を測る。**35～41** は SB07 の柱穴内出土遺物である。特に **36～40** は P58 出土の一括資料である。

35 は P162 出土の土師器で、復元口



第10図 SB03・04

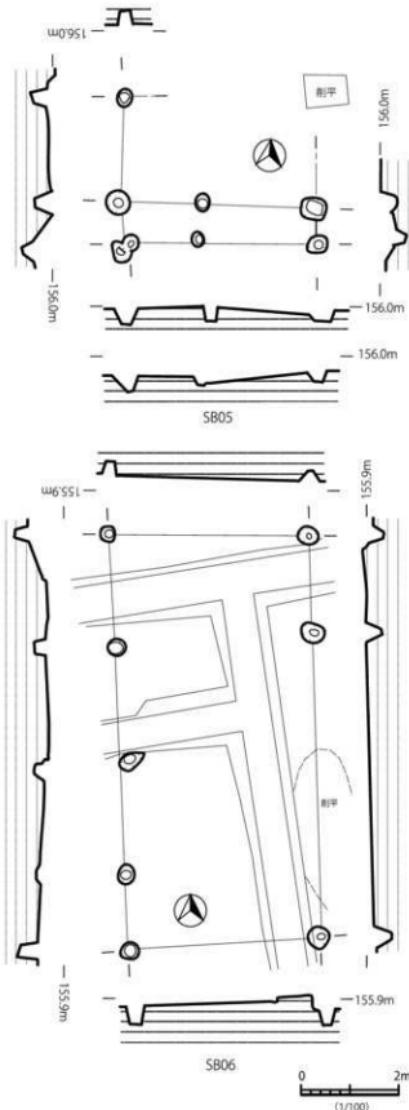
側溝を含む遺構全体の幅は最大で3.8mで、側溝を除く硬化面幅は1.6m～2.3m、確認できた総延長は19mに及ぶ。側溝は、東側(SD01)が、幅0.9m～1.2m、深さ約0.2mで、西側(SD02)が幅0.6m～0.9m、深さ約0.2mである。SD01については平面および断面から、掘りなおしが認められ、SD01-1

この他、遺跡内からは当該期の柱穴が多数検出されており、柱穴よりいくつか遺物が出土している。31は染付碗。42は碗で、口縁部の一部が僅かに窪む。口径8.15cm、底径3.55cm、器高4.6cmである。43・45は薩摩焼土瓶である。

②道路状遺構

調査区を東西、南北に走行する道路状遺構が2条検出された。いずれも幕末～明治にかけての遺構と考えられ、C-6区付近で分岐する1連の道路状遺構である可能性も考えられる。

SD01(第14図)：調査区東端をD-6・7区からB-6・7区にかけて南北に走行する道路状遺構で、両側に側溝を合わせもつ(B-7区以南については現代の削平によって未確認)。道幅は1.8m～2.3m、硬化面は褐色～灰黒色土を含む御池軽石を主体とするもので、C区の南半分より以南は削平されているが、残された御池軽石が硬くしまっており、地形に沿って南側へ下っている。D・C区周辺で御池軽石を主体とし褐色から灰黒色土を含むのは、道路状遺構より以前に構築された池状遺構の埋土を掘削しているためと考えられる。



第11図 SB05-06

54～59はSF02側溝(SD03・04)より出土した遺物である。54は染付端反碗で外面には山水文、内面には扇文が描かれる。55・56は土師器で底部切り離しは糸切り。両者とも復元底径は8cmである。57

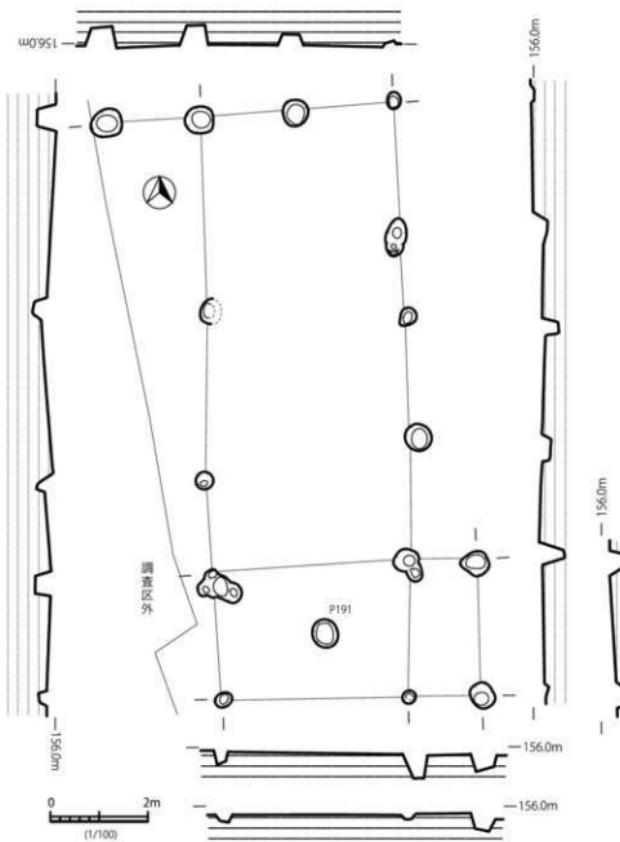
としたほうが古く、SD01-2とした東側が新しいと思われ、SD01-1の一部は上部に硬化面が確認されている。

遺物は道路状遺構の側溝部分より出土しているが、大半は道路状遺構廃絶後の造成の際に混入したものが多いと考えられ、古いもので16世紀末～17世紀、新しいもので19世紀代の遺物が出土しており、特に18世紀後半～19世紀代の陶磁器類・瓦・軽石製品が多い。

46～53・80はSF01の側溝(SD01・02)出土遺物である。46は青花碗で、底径5.6cmで、内外面に細かい貫入が入る。疊付はヘラ削りで釉が削られ、高台内面も施釉される。16世紀末～17世紀代と思われる。47は肥前内山町簡江窯の碗で外面は青磁釉、見込みは二重圓線内に手描きの五弁花が描かれる。高台内には「簡江」の銘款が認められる。48は染付碗で、見込みは蛇ノ目釉剥ぎ後にアルミナが塗布されている。49は染付端反碗で、SB01-2のP20出土と接合している。50は染付碗で外面に梅文が描かれる。51は苗代川系薩摩焼甕底部でコマ目が残る。底径18.8cmで、底部はやや上げ底氣味。52は龍門司系薩摩焼甕で、外面全体に白土が掛けられ、全体的に鉄釉が施されるが、見込みは蛇ノ目釉剥ぎで砂粒が付着、高台内は路胎。底径4.2cm。53は苗代川系薩摩焼擂鉢。80は鞆の羽口でSD01内より出土している。羽口は残存で6.7cm、復元直徑は約4.4cm、孔径は約2.4cmである。

SF02(第15図)：調査区を東西に走行する道路状遺構で、規模、構造、出土遺物等を考慮すると、おそらくSF01と繋がる道路状遺構であると考えられる。SF01同様両側に側溝を持ち、側溝を含む幅は3.8m～4.2m、硬化面幅は1.6m～2.5mである。残念ながら硬化面は削平されており確認できなかったが、一部御池軽石が硬くなっているところが見られ、遺構構築時よりかなり掘削を受けていると考えられる。

溝幅は北側(SD03)が0.5m～1.2m、深さ0.15m～0.2m、南側(SD04)が、幅0.8m～1.3m、深さ0.15m～0.2mである。東に向かってやや下る。この2つの溝は大正時代以降(昭和か)にもほぼ同一上を走行する溝(旧校舎の排水溝?)によつて上部が削平を受けている。



第12図 SB02

幅10.7cm、厚さ8.3cm、重量250gで、3cm前後の工具によって縦方向に加工が施されている。特に縦方向中央に窪みを作り出している。

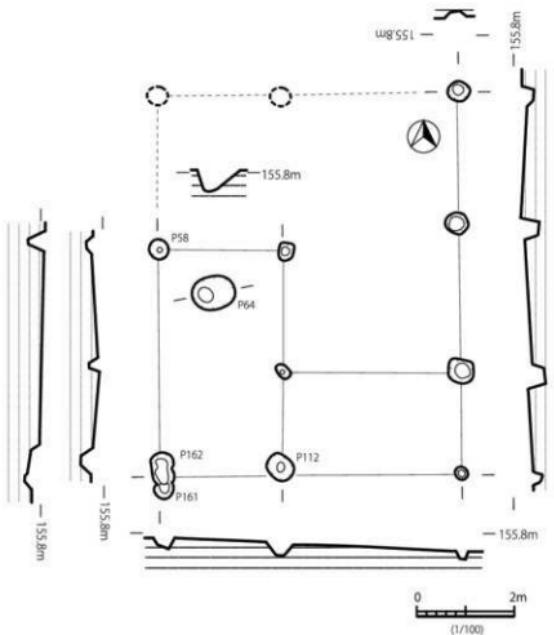
③土坑（第16～21図）

近世～近代の土坑は8基検出した。うち2基については方形の竪穴状を呈する(SC01・06)もので、2基は池状遺構もしくはそれに付随する土坑(SC02・03)で、1基は埋甕(SC04)である。残りについては用途不明である。

SC01: C・D-5・6区に位置する。後世（大正8年の火災後か?）のゴミ穴によって、遺構の大半が削平を受けている。ゴミ穴からは明治～大正にかけての陶磁器類やガラス片等が出土している。

残存する遺構の規模は東西2.7m、南北2.7m、深さ0.45mである。土坑の南西隅には柱穴状の落ちと、壁際には浅い溝状の落ちが認められた。また、埋土中位では、南側のみ、幅約15cmの範囲で灰が認められ、焼けた軽石が同レベルから上位にかけて検出された。この軽石は、出土時は、5個体であったが、その後全てが接合し、1個体であることが判明した。**82**の軽石は、方形に加工されており、左側面は煤が、下面と

は苗代川系土瓶蓋でツマミ部分が欠損している。口径6.8cm、底径9.2cm。**58**は苗代川系甕口縁部片。**59**は龍門司系薩摩焼仏飯器で、底径3.6cm。**81**はSD04出土の碗形滓で、底面に木質を含む。重量は106gである。**84～86**はSD04から出土した軽石製品である。**84**は、長さ18.4cm、幅15.9cm、厚さ15.5cm、重量1.47kgを測る。側面は幅3～5cm程度の工具で長軸に沿って加工が施され、下面に径4.5cm程度の不正円を呈する彫り込みが認められる。**85**は、半分程度を欠損していると思われるが、軽石製容器（皿?）と考えられる。残存で長さ10.7cm、幅15.7cm、厚さ7.2cm、重量310gである。幅1.5cm前後の工具で加工が施されている。左側中央の縁は片口状の窪みが作り出されている。**86**は長さ14.2cm、



第13図 SB07

呈し、断面はすり鉢状を呈す。遺構底面は中央の最深部を中心に泥等で御池軽石が汚れており、埋土中も砂が堆積していることから、泥や水が流れ込む状態であったと考えられる。しかしながら、遺構底面からは敷石等は確認できず、遺構内から軽石が数点出土するのみであった。

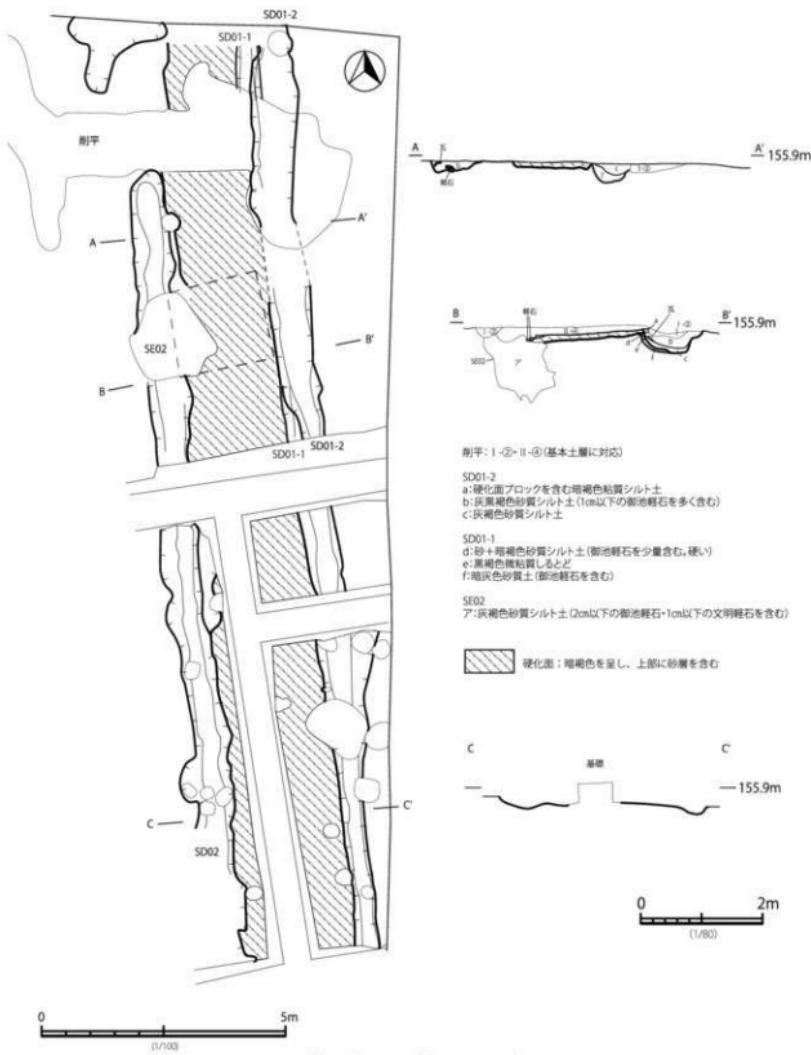
60・61・76はSC02出土遺物である。**60**は流れ込みと思われる中世土器で、底部切り離しは糸切り、底径5.7cmである。**61**はSF01の硬化面下の5層より出土した肥前系染付皿である。内面は変様性のある菊唐草文と思われ、見込にはコンニャク印判による五弁花と二重圓線が描かれ、蛇ノ目釉剥ぎが認められる。(波佐見焼か?)。**76**は軒丸瓦である。調査区東壁の断面より出土している。直径14.0cm、瓦当厚1.7cm、外縁高0.7cm、外縁幅1.5cmである。巴文と連珠文からなる。巴文の断面は丸みを持ち厚く、ぐびれを有し、尾はやや短め、連珠文は17からなる。珠文間はやや狭めである。胎土には鉱物を含んでおり、滑石粉末もしくは石英あるいは火山ガラスの可能性もある。瓦の調整は工具ナデののち丁寧にナデが施されている。

SC03: SC02の南に接する土坑で、近代の井戸跡(SE02)によって大きく削平を受けている。SC02同様すり鉢状を呈す土坑である。遺構構築時の規模は不明であるが、SF01下面での規模は南北3.2m、東西2.5m、検出面からの深さは0.7mである。断面および埋土の状況からSC02同様かもしくはSC02に付随する遺構である可能性が高く、遺構内からは鉄滓や轍の羽口も出土している。

62～65・77～79はSC03出土遺物である(うち**62・64・65・77・79**はH20年度試掘出土)。**62**は肥前系染付端反碗で、外面に山水文が描かれる。見込は蛇ノ目釉剥ぎ。口径10.9cm、底径4.0cm、器高4.8cm。**63**は龍門司系薩摩焼小鉢である。内外面に厚く白土が掛けられ、施釉後内面に部分的に鉄釉で絵付けされている。口径12.7cm、底径5.05cm、器高5.35cm。**64**は薩摩焼皿で内面に鉄釉が施され見込みには砂粒が残る。**65**は苗代川系薩摩焼擂鉢である。**77**は丸瓦で、**76**同様胎土に鉱物を含んでいる。凹面は工具によるケズリおよび布目が残り、側面はケズリが残る。凸面は丁寧にナデが施される。**78**は軒平瓦である。

裏面は被熱により赤～褐色化している。長さ15.1cm、幅10cm、厚さ6.8cm、重量260gである。表面には加工によって凸状の形状をなし、その上部は裏面に貫通するように加工が見られる。上部を欠損しているか、元來の形かは不明であるが、ホゾ穴のようなものか。機能・用途は不明である。その他の遺物はいずれもゴミ穴からの出土で、SC01に伴うと考えられる遺物は確認されていない。

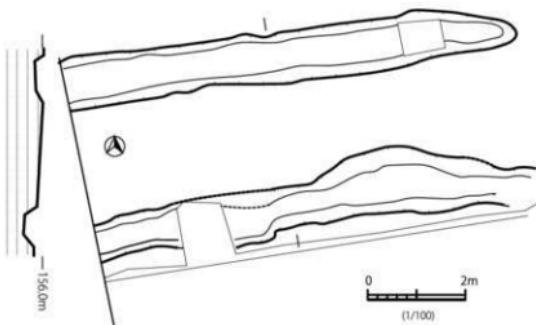
SC02: 道路状遺構(SF01)の硬化面より下位で検出された。確認された遺構の範囲は南北4.2m、東西3.9mで、検出面からの深さは0.7mである。調査区東側土層断面にもSC02と思われる遺構の一部が確認できることから、実際は、平面もかなり大きく、深さは最低でも1m以上あったことが伺える。検出面での平面形態は隅丸方形を



第14図 SF01(SD01+SD02)

文様は唐草文で全体的に二次焼成を受けている。胎土には76・77同様鉱物が含まれる。79は彫の羽口である。残存で直径10.6cm、孔径5.0cm~3.2cmでラッパ状に開く。

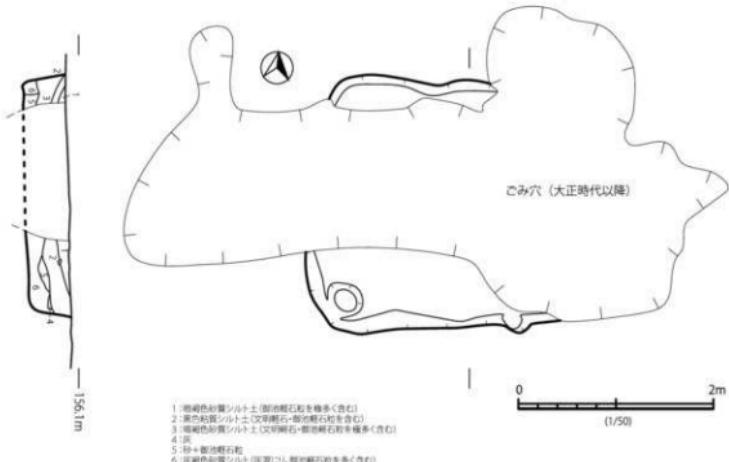
SC04：B-6区で検出された。長軸0.72m、短軸0.53m、検出面からの深さ0.2mの平面楕円形、楕円形を呈する土坑に薩摩焼窯（67）が埋められていた。土坑は窯よりもかなり大きめで、窯の東側には窯の同部の湾曲に沿って加工された軽石（83）がはめられており、これによって窯を固定していたものと思われる。



第15図 SF02 (SD03・04)

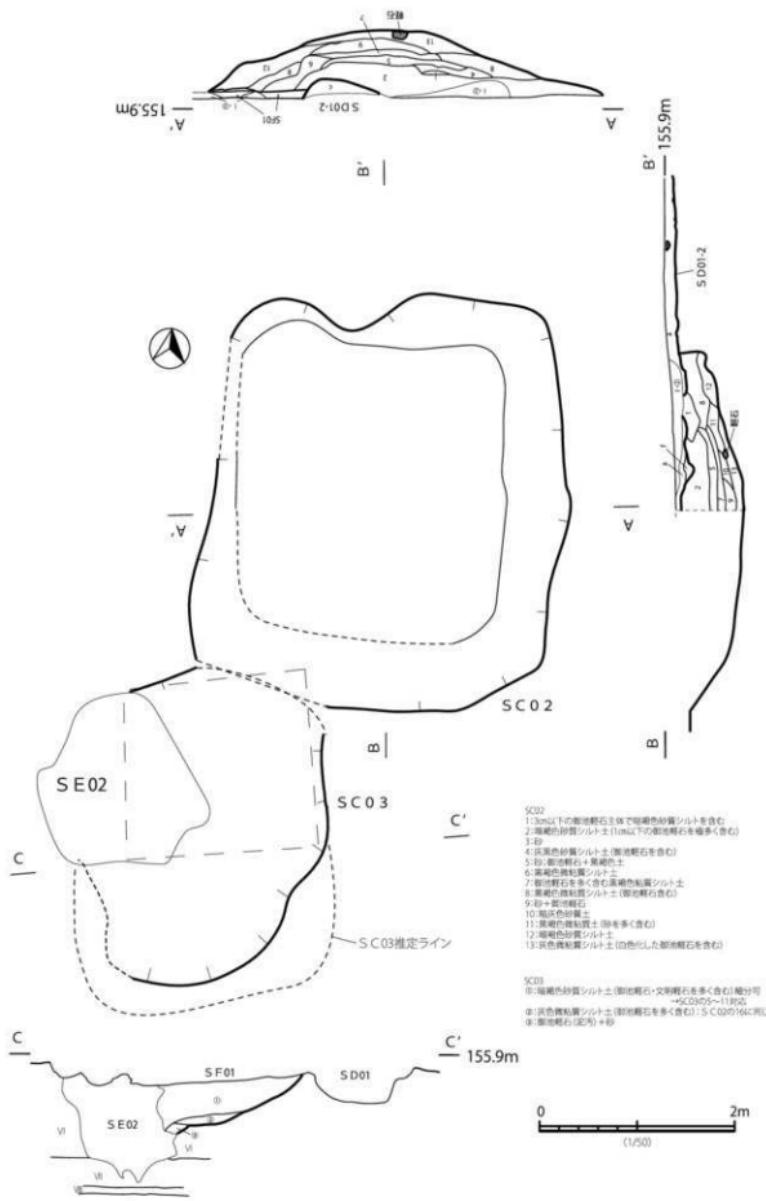
側に南北に走行する SD05 の先端が柱穴によって削平を受けているもののこの埋甕に接しており、一連の遺構である可能性も多い。67 は苗代川系薩摩焼甕で、全体的に鉄軸が施され、体部に草花文が描き落として描かれている。口唇部と底部にコマ目が残る。66 は肥前系白磁角皿で、菊花文が陽刻されている。83 は甕を固定していたと思われる軽石である。長さ 14.8cm、幅 9.5cm、厚さ 6.7cm、重量 260 g で、甕に接する側面を幅 3cm 程度の工具で加工が施されている。

SC05 : SD02 の南端に位置する。長軸 0.8 m、短軸 0.4 m、深さ 0.1 m である。SF01 の側溝である SD02 によって切られている。68 ~ 71 は、SC05 出土遺物である。68 は苗代川系薩摩焼甕で、口径 34.8 cm である。69・70 は龍門系薩摩焼碗で、69 は白土が掛けられ鉄軸が施される。口径 10.8cm、底径 4.6cm、器高 5.35cm。高台際より露胎。70 は内外面には白土が掛けられ鉄軸が施される。高台際より露胎。見込みは蛇ノ目釉剥ぎで底径 4.2cm。71 は薩摩焼で外面は鉄軸が施され内面は無釉。復元口径は 6.3cm。この他に

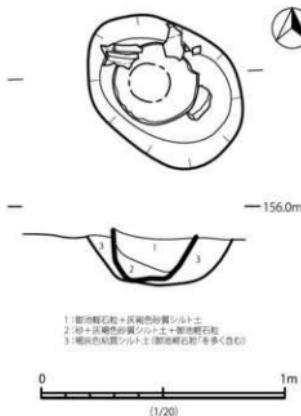


第16図 SC01

検出時すでに上部は削平を受けていたものの、底部から口縁部まで一部は残されていた。甕内は 2 層に分層可能で、上層は灰褐色砂質シルトを含む御池輕石を主体とする層で、下層は上層を含むものの砂を主体とする層であった。また、甕内部には厚さ 2 mm 程度の明黄褐色の付着物が全体的に認められた。おそらく排泄物が付着したものと考えられ、当遺構は当時のトレイと考えられる。使用された甕は 18 世紀後半頃のものと考えられるが、遺構の存続時期とはズレがある可能性もある。また、埋甕のすぐ東



第17図 SC02・03

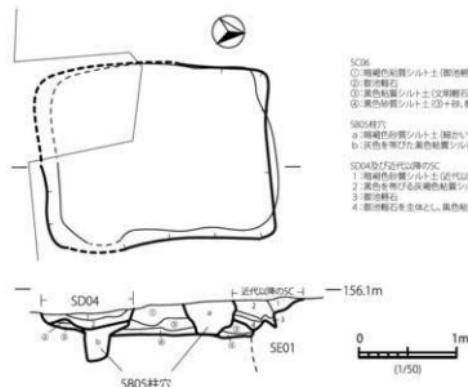


第18図 SC04(埋葬)

SD05: B-6 区を南北に走行する溝状遺構である。旧校舎基礎によって東側、南側は確認できなかった。遺構内からの出土遺物はなく、埋土も單一である。

⑦井戸跡（第 22・23 図）

SE01: C-5・6 区に位置する。南側を SC06 に、北側を SD03 によって削平されている。長径 1.5 m、短径 1.4 mで、深さは 5.6 m 以上である（調査の安全上、井戸底は確認できなかった）。調査時は上部がかなり削平されていたため、井戸存続時は 6 m を超える深さであったと考えられる。確認できたところで掘削はシラス層まで達していた。シラスとシラス直上の黄橙色粘質土の間に 10cm 程度の隙間が全周に認められたため、おそらく、この隙間より、地下水が染み出していたものと思われる。井戸内からは遺物の出土がほとんどなく、埋土上位で弥生土器と思われる土器片と土師器片（中世か）が出土しているのみである。



第19図 SC06

図示していないが、下関産の赤間砥石と思われる破片が出土している。

SC06: C-5・6 区に位置する。SD04、SB05 より古く、SE01 より新しい。規模は東西 1.9 m、南北 2.4 m の方形を呈す。北側の壁はやや袋状に掘り込まれている。埋土は暗褐色～黒色を呈し、御池軽石を多く含み、文明軽石を含む層も認められる。

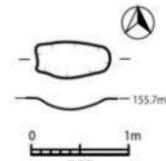
72 は龍門司系薩摩焼碗で、内外面に白土が掛けられ、見込みは蛇ノ目釉剥ぎ、目痕が残る。高台際より露胎。底径は 5.0 cm。

73 は薩摩焼皿で、見込みにはゴマ目積みの痕が残る。内面のみ非常に薄い鉄釉がかかる。底径は 4.9 cm、底部切り離しは糸切りである。

SC09: SD01、SB04 よりも新しい。長軸約 1.0 m、短軸 0.9 m、深さ 0.5 m である。埋土は御池軽石を主体とし、砂を多く含んでいる。土坑内からは完形の白磁碗が出土している。

74 は白磁端反碗で、費付は無釉で、見込みは蛇ノ目釉剥ぎ、口径 11.5 cm、底径 4.5 cm、器高 5.25 cm である。75 は染付碗。

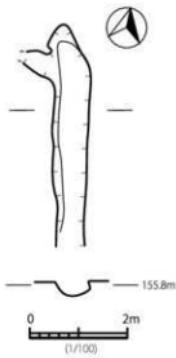
⑤溝状遺構（第 21 図）



第20図 SC05



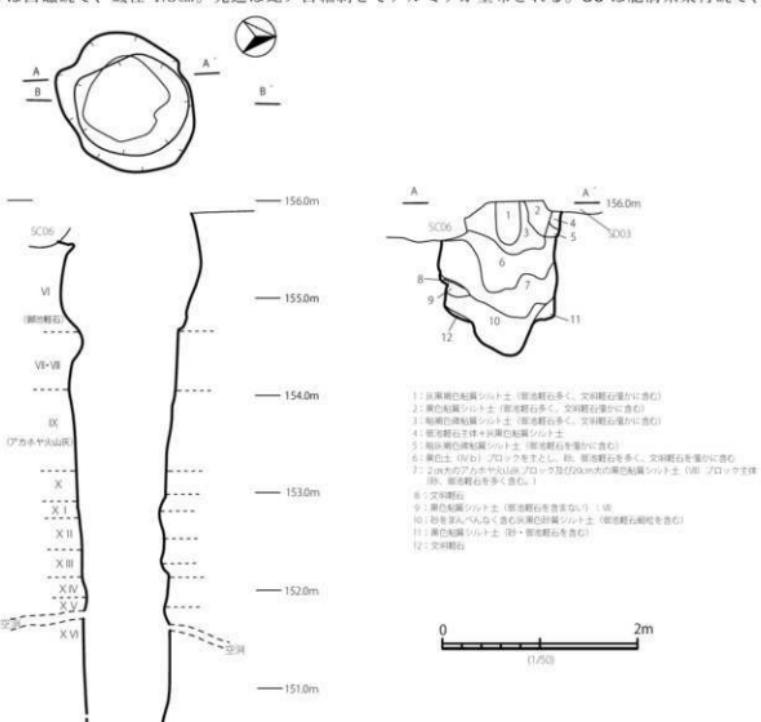
第21図 SC09



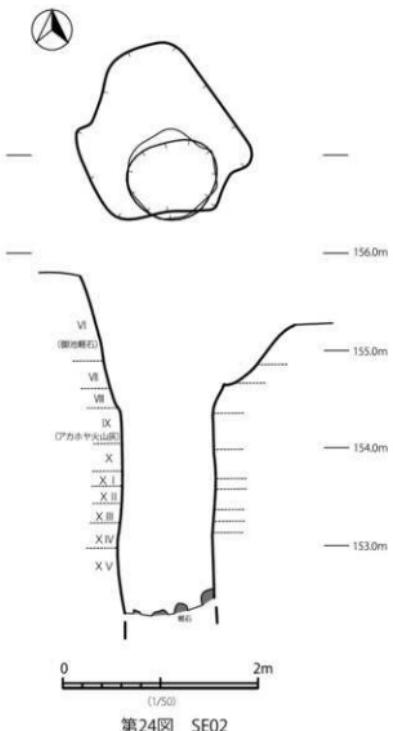
第22図 SD05

埋土は上位に灰黒色砂質土が認められ、以下黑色粘質土系（御池軽石、文明軽石を含む）、井戸を掘り上げた際に排出されたアカホヤ火山灰ブロックや砂等を含む層や黑色粘質シルト土系の層下位より、文明軽石の1次堆積と思われるものが薄く堆積していた。また、井戸最上位では柱穴の断面が確認されており、後述する近世の土坑であるSC06によって一部削平を受けていること、後述する近世以降の井戸SC02とは埋土等の様相が異なることからも、おそらく中世～近世にかけて構築された遺構である可能性が高いと考えられる。

SE02: C-6 区に位置する。SC03を削平する形で掘り込まれている。長軸 1.8 m、短軸 1.7 m、深さは確認できただけで 3.7 m である。安全確保のため、これ以上の掘り下げは行っていない。井戸内からは幕末～大正時代にかけての遺物が出土している。大正四年の庄内村治要綱によれば、庄内小学校の校舎に敷設する別棟の近くに井戸が置かれているとの記述があり、校舎拡張の様相からも、この井戸が SE02 に該当する可能性も高い。調査に至った 3.7 m 付近では軽石が投げ込まれたように井戸全体に認められ、それに混じって 18 世紀後半～19 世紀頃の陶磁器類が出土している。井戸中位～上位にかけては明治～大正時代のものと思われる陶磁器・ガラス・瓦等が多く出土している。図示した遺物は主に軽石検出レベルから出土したものを主に掲載している。**88** は白磁碗で、底径 4.8 cm。見込は蛇目釉剥ぎでアルミナが塗布される。**89** は肥前系染付碗で、復



第23図 SE01



第24図 SE02

付端反碗で見込は蛇ノ目釉剥ぎ。高台内に圈線が描かれる。底径 5.5cm。**101**は外面に梅樹文が描かれる染付碗で、内外面に貫入が認められる。**102**は肥前系染付半筒形碗で、底径 5.8cm。疊付は無釉で、内外面に細かい貫入が認められる。**103**も肥前系半筒形碗で外面は鞠挾文、底面に折れ松葉文が描かれる。見込は不明。底径 3.3cmで、内外面に貫入が認められる。**104**は肥前系桶形猪口で、復元口径 5.8cm、底径 4.0cm、器高 3.8cm。**105**は白磁の朝顔形小杯。口径 7.15cm、底径 2.55cm、器高 3.6cmで、疊付は無釉で砂が付着している。内外面はやや粗めの貫入が入る。**106**は白磁紅皿。口径 4.8cmで、内面から外面体部上半部まで施釉される貝殻状のものである。**107**は肥前系染付皿で蛇ノ目凹高台。見込は笹文、外面は蜻唐草と思われる。復元底径 9.0cm。**108**も肥前系染付皿で蛇ノ目凹高台の皿。見込みは波文が描かれる。外面は細かい貫入が認められる。復元口径 8.6cm。**109**は肥前系染付皿で外面に折れ松葉文、見込みは草花文か。口径 10.0cm。**110**は龍門司系薩摩焼碗。内外に白土が掛けられ鐵釉が高台際まで施される。高台内無釉。見込は蛇ノ目釉剥ぎ。底径 4.45cm。**111・112**は苗代川系薩摩焼の茶家蓋。**111**は口径 4.4cm、底径 6.4cm。**112**は口径 6.8cm、底径 9.0cm。**112**の鐵釉の施釉がやや薄く雑。113は薩摩焼灯明皿。底径 5.25cmで、底部には煤が付着する。**114**は薩摩焼仏飯器。見込は蛇ノ目釉剥ぎ。底径 4.25cm。**118**は苗代川系薩摩焼丸形土瓶。口径 8.4cmで、下部は煤が付着する。**119・120**は薩摩焼すり鉢。**119**は口径 26.8cm、内面の施釉は薄く、外面は厚い。内面はヨコハケが薄く残り、縱方向櫛目は細い。**120**は底径 13.6cmで、外面は施釉され内面は無釉。縱方向の櫛目は太い。

元底径 4.4cm。外面は草花文が描かれ高台内には銘款が見られる。**90**は底径 4.8cmの肥前系染付碗で、見込みは蛇ノ目釉剥ぎ、外面には雨降り文が描かれる。**91**は肥前系染付蓋で、外面は蜻唐草文が描かれる。復元口径 14.4cm、底径 15.5cm。**92～94**は龍門司系薩摩焼碗。**92**は底径 4.6cm、内外に白土が掛けられ高台際まで施釉される。見込は蛇ノ目釉剥ぎ。**93**は内面から外面体部中位まで白土が掛けられ、見込みは蛇ノ目釉剥ぎで内面に細かい貫入が入る。底径 4.6cm。**94**は底径 5.4cmで、見込みは蛇ノ目釉剥ぎ、内面に白土が掛けられ、内外面とも厚く施釉され、細かな貫入が入る。高台際から高台内は無釉。**95**は肥前系染付半筒形碗で外面は松竹梅文と折れ松葉文が、見込みはコンニャク印判による五弁花、内面は四方擣文が描かれる。全体的に細かい貫入が入り、疊付は砂が付着する。底径 4.2cm。**96**は苗代川系薩摩焼鉢で口径 31.4cm。**97**は苗代川系薩摩焼甕で、肩部に断面三角の凸帯を有する。口径 32cm。

2. その他の遺物

①土師器

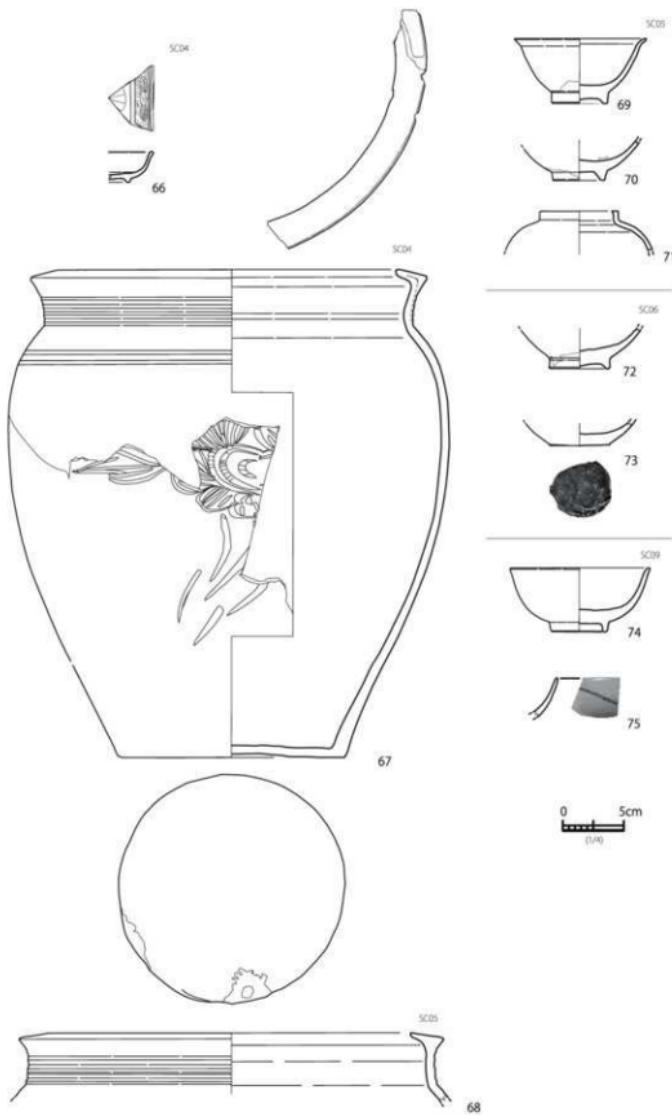
98は復元底径が 8.0cm、底部切り離しは糸切りである。淡黄～浅黄橙色を呈する。この他小片のため図示していないが、土師器片が数点出土している。

②陶器

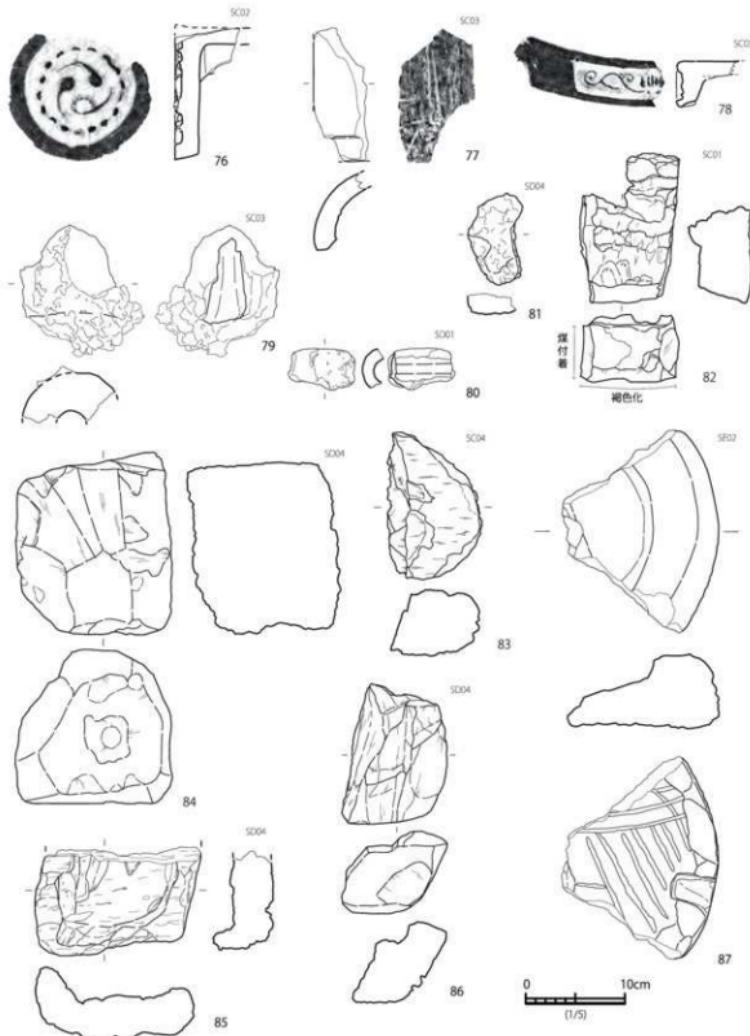
表土及び撥乱土中の出土遺物を一部掲載する。**99**は外面梵字文、見込みに昆虫文が描かれる染付碗で、底径 3.7cm。疊付は無釉で、全体的に貫入が入る。**100**は染付碗で見込は蛇ノ目釉剥ぎ。高台内に圈線が描かれる。底径 5.5cm。**101**は外面に梅樹文が描かれる染付碗で、内外面に貫入が認められる。**102**は肥前系染付半筒形碗で、底径 5.8cm。疊付は無釉で、内外面に細かい貫入が認められる。**103**も肥前系半筒形碗で外面は鞠挾文、底面に折れ松葉文が描かれる。見込は不明。底径 3.3cmで、内外面に貫入が認められる。**104**は肥前系桶形猪口で、復元口径 5.8cm、底径 4.0cm、器高 3.8cm。**105**は白磁の朝顔形小杯。口径 7.15cm、底径 2.55cm、器高 3.6cmで、疊付は無釉で砂が付着している。内外面はやや粗めの貫入が入る。**106**は白磁紅皿。口径 4.8cmで、内面から外面体部上半部まで施釉される貝殻状のものである。**107**は肥前系染付皿で蛇ノ目凹高台。見込は笹文、外面は蜻唐草と思われる。復元底径 9.0cm。**108**も肥前系染付皿で蛇ノ目凹高台の皿。見込みは波文が描かれる。外面は細かい貫入が認められる。復元口径 8.6cm。**109**は肥前系染付皿で外面に折れ松葉文、見込みは草花文か。口径 10.0cm。**110**は龍門司系薩摩焼碗。内外に白土が掛けられ鐵釉が高台際まで施される。高台内無釉。見込は蛇ノ目釉剥ぎ。底径 4.45cm。**111・112**は苗代川系薩摩焼の茶家蓋。**111**は口径 4.4cm、底径 6.4cm。**112**は口径 6.8cm、底径 9.0cm。**112**の鐵釉の施釉がやや薄く雑。113は薩摩焼灯明皿。底径 5.25cmで、底部には煤が付着する。**114**は薩摩焼仏飯器。見込は蛇ノ目釉剥ぎ。底径 4.25cm。**118**は苗代川系薩摩焼丸形土瓶。口径 8.4cmで、下部は煤が付着する。**119・120**は薩摩焼すり鉢。**119**は口径 26.8cm、内面の施釉は薄く、外面は厚い。内面はヨコハケが薄く残り、縱方向櫛目は細い。**120**は底径 13.6cmで、外面は施釉され内面は無釉。縱方向の櫛目は太い。



第25図 近世～近代の遺物①



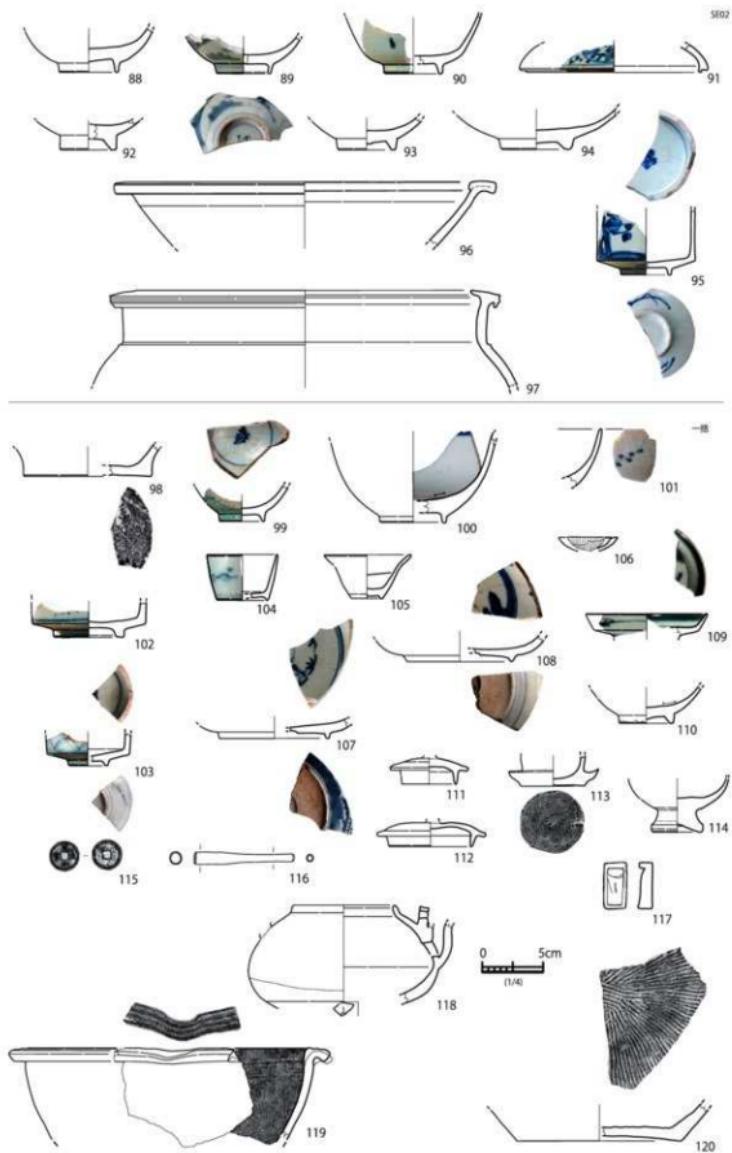
第26図 近世～近代の遺物②



第27図 近世～近代の遺物③

④その他

石製及び銅製品が数点確認されている。115は寛永通宝で「寛」と「通」の間に穴が開いている。116煙管で、長さ8.2cm。117は滑石製のミニチュア硯。長さ3.8cm、幅1.9cm、厚さ1.2cm、重量18g。



第28図 近世～近代の遺物④

第4章　まとめ

今回の調査によって、庄内小学校周辺では少なくとも縄文時代晚期には人々が生活していたことが伺える。調査区の大半が近現代の造成によって大幅な掘削を受けていたため、遺構の検出は勿論のこと、遺物の出土も限られたものの、縄文時代晚期・弥生時代前期から中期にかけての遺物が南側調査区から出土しており、削平を受けた部分に遺構が存在した可能性も考えられる。

中世についても同様で、調査に入るまでは、安永城跡と同時期かそれに前後する時期の遺構が確認されることが期待されたが、残念ながら、明確な建物等の検出には至らなかった。

近世～近代においては、地頭仮屋周辺の集落という位置付けで調査を開始したが、やはり後世の削平により、各遺構の時期を比定することが非常に困難な状態であった。調査の結果、遺構の切り合いや出土遺物から、これらの遺構は、土坑を主体とする江戸後期（18世紀後半）、道路状遺構を主体とする幕末～明治時代、明治末～大正時代の大きく3期に分けられる。しかしながら、SD01出土の青花についてはおそらく16世紀末～17世紀、SC02・03出土の瓦については棟瓦出現以前の、江戸前期の所産であると考えられることから、上記の3期以前に江戸前期の遺構が存在したことは否めない。江戸後期の遺構であるSC02・03については、検出時SF01によって上部を大幅に削平されていることを鑑みれば、かなり大規模な遺構であったことが想定され、遺構内に水が湛えられていた可能性も高く、一般的な集落にそのような施設があったとは考え難い。しかしながら江戸後期の絵図には遺跡部分については特段描かれていなかることから、公的施設や寺院といったものは存在していなかったと考えられる。幕末から明治にかけての道路状遺構についても、かなり大幅な掘削を伴うものである。残念ながら今回の調査では、この道路状遺構と同時期の建物等を検出するに至っていないが、規模から考えても集落内の主要な道であったと思われる。

また、井戸跡については、桑原遺跡でも見つかっており、明治時代の記録からも、遺跡周辺は水が豊富であったことが伺える。SE02については近代以降のものと思われるが、SE01についてはその時期が判然としない。遺構の切り合いから考えると、18世紀後半より前には廃絶したと考えられ、覆土からは弥生土器及び土師器片のみが含まれた。また、少量ではあるが、文明軽石のブロックも認められたことから、中世後期～江戸までの範囲が考えられる。

遺跡から出土した遺物は主に18世紀後半から19世紀のもので、肥前系陶磁器と薩摩焼がその大半を占める。これらの遺物は市内の近世遺跡から出土するものとほぼ同時期かそれより若干新しいものである。これまで調査された遺跡は島津家家老屋敷地に否定される八幡遺跡、町屋や屋敷地など、唐人町周辺の中央東部地区遺跡群、当時の一大屋敷地であった久玉遺跡や水田経営に関連する集落地である肱穴遺跡などが挙げられる。調査面積が狭小であることも挙げられるが、これらの遺跡との大きな違いは、溝で区画された建物配置が確認されなかったことである。また、瓦については、都城市内において近世集落遺跡からの出土は初例である。この時期に一般集落で瓦吹きの建物が存在したことは非常に考えがたく、これらの瓦が、どのような経緯で残されたかは不明であるが、SC02の池状の土坑もふくめ、江戸後期以前と幕末以降では当地はまったく異なる機能を果たしていたと考えられる。

また、古記録からも、明治初頭の小学校区域は今回調査区東側に当たると考えられるため、おそらく小学校建設時、既に何らかの建物等があったことが伺える。また、初期の小学校は地頭仮屋の敷地内にて行われていたとの記録もあるため、地頭仮屋の敷地が現在のどの範囲に当たるかが判然としないため、憶測の域を出ないものの、一般集落というよりは、地頭仮屋に関連する人物の屋敷地であったか、あるいは在地の有力層の屋敷地施設の一部であった可能性が考えられる。



1. 東側調査区東壁土層(SC02 東側)



2. 東側調査区東壁土層(SC03 東側)



3. 南側調査区南壁土層堆積状況



4. 南側調査区南壁土層拡大



5. 南側調査区遺物出土状況(左下はSC07)



6. 土器出土状況

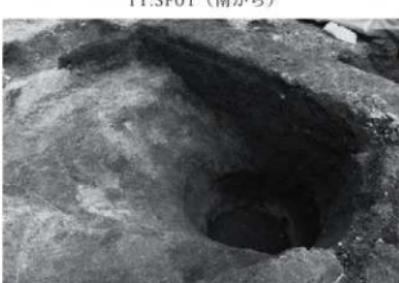
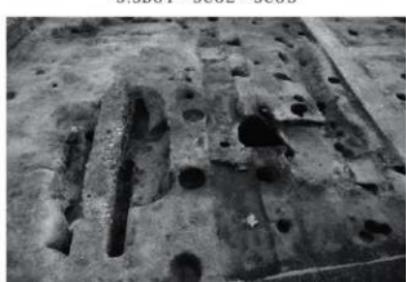


7. SC07 断面(東から)



8. SC07(東から)

図版2



図版3



16.SC04 半裁状況（北から）



17.SC09 半裁状況（西から）



18.SC06・SE01 土層断面（東から）



19.SC06 完掘（南から）



20.SE01（北から）：周囲はXⅡ層上面まで掘り下げ



21.SE02（北から）：周囲はXⅠ層上面まで掘り下げ

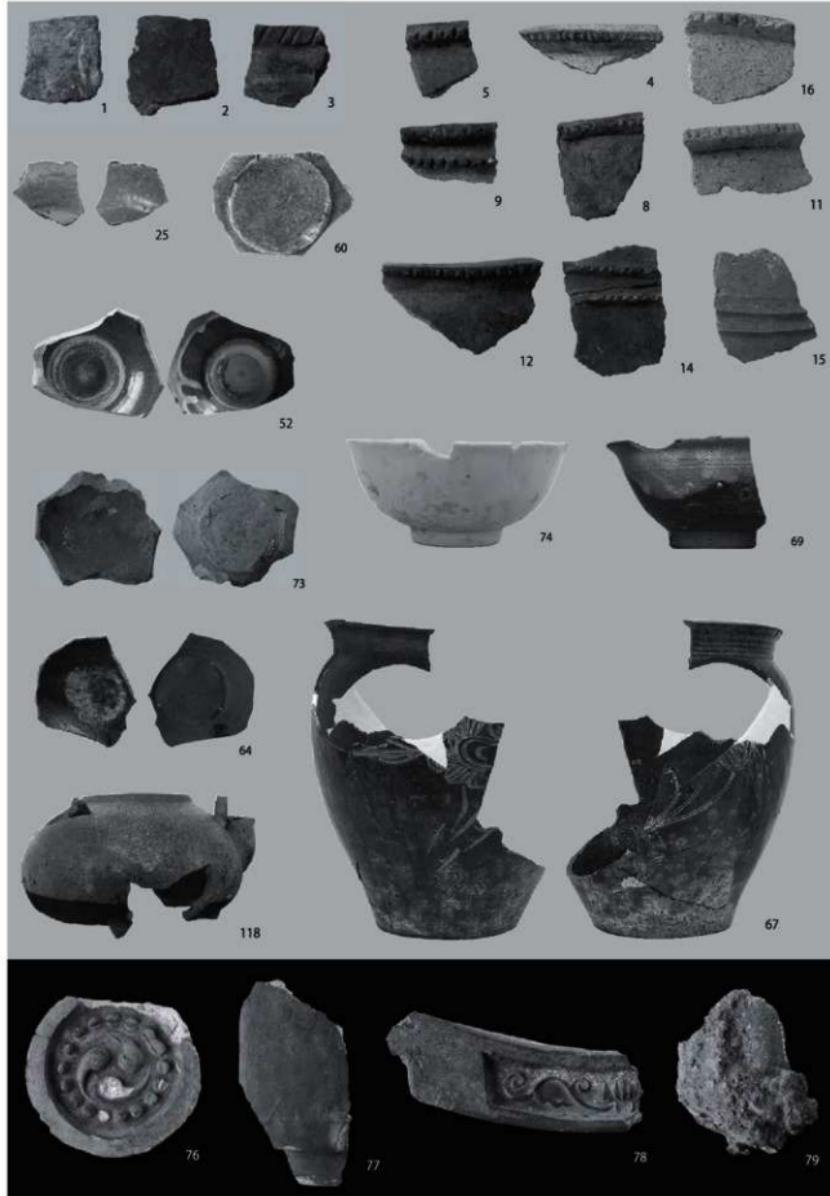


22. 遺跡見学会



23. 発掘体験

図版 4



報告書抄録

書名	庄内小学校遺跡					
副書名	屋内体育館建替えに伴う発掘調査					
シリーズ名	都城市文化財調査報告書					
シリーズ番号	第100集					
編著者名	栗山 葉子					
編集機関	宮崎県都城市教育委員会					
所在地	宮崎県都城市姫城町6街区21号					
発行年月日	2010年3月29日					
所収遺跡名	所在地	北緯	東経	調査期間	面積	調査原因
庄内小学校遺跡	宮崎県都城市庄内町	31°46'23"	131°01'06"	2009年8月3日 ～ 2009年10月9日	760m ²	学校 (屋内体育館建替え)
遺跡名	種別	主な時期	主な遺構	主な遺物	特記事項	
庄内小学校遺跡	集落	绳文・弥生 中世 近世～近代	土坑 柱穴 掘立柱建物跡 道路状遺構 土坑 井戸跡	土器 土師器・青磁 陶磁器・土師器・ 瓦・羽口・鉄滓		

* 遺跡の緯度及び経度は世界測地系による。

都城市文化財調査報告書第100集

庄内小学校遺跡

屋内体育館建替えに伴う発掘調査

2010年3月29日

編集 宮崎県都城市教育委員会 文化財課

発行 〒885-0034 宮崎県都城市菖蒲原町19-1
都城市役所菖蒲原町別館
TEL (0986) 23-9547 FAX (0986) 23-9549

印刷 株式会社 文昌堂
〒885-0052 都城市東町18街区1号
TEL (0986) 22-1121 FAX (0986) 25-6408